

---

# World Decoder

ばるでら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

World Decoder

### 【NZコード】

N5253F

### 【作者名】

ばるでら

### 【あらすじ】

タイトルはぶっちゃけ適当。ただし内容はそこそこを目指すファンタジー。舞台は異世界、登場人物はキャラ重視そんなファンタジー。主人公は決まってません。殺し屋とか天才バッターとか吸血鬼とか超インファイター魔法使いとかの短編集をつなぐ予定のそんなファンタジー 携帯の方文字サイズは極小に

## トポード・トポード(前書き)

この一話は書き方が分らなかつたので変なところで区切つちやつてます。  
実質一話と合わせて一話分です

## テザート・テザート

ある晴れすぎた日の曇下がり

雨期はこの前過ぎた為今日もいつも通り雲一つない

雲の嫉妬を免れた天はどこまでも青く蒼く透き通り

そして透き通った空間を太陽光は今日も容赦なく降り注ぐ

そして降り注ぐ太陽光は矢の如く

「あ、～～づ～～い、～～」

どこまでも渴きに渴いた砂天国（いわゆる砂漠）の中を力無く歩く  
ひとりの女性に突き刺さっていた

太陽光による火傷を防ぐためか彼女は真っ黒なロングコートを羽織り  
銀の髪が覗くおでこにはスマイリーマークなお面を斜め掛け  
その下にのぞかせる顔は子供っぽさを残すがとても端正な物であり  
雪のような真っ白い肌に兎のよつた赤い眼が、より神秘性を増して  
いた

顔立ち通りに体も華奢な彼女だが、背中にはどうしたことが半端で  
はなく重そうな自分より大きいサイズの鉄製棺桶を鎖で巻いて上手  
く背負いつぶつとしている

「つうう……」

と声にならない声で呻きながら

彼女は懐からなんとも不釣り合いにでかい水筒を取り出し、不安げな顔をしながら上へ下へにシェイクした

シェイクされた水筒から聞こえる、ひじょーーに頼りないシャパシヤパという音を聞いて

「あつあ…………」

と、彼女は涙目で天を仰ぐ

そんな薄幸の美少女が今回の話の主役

その名はホリー・ヴァランス

この世界に召喚された、元殺し屋である

「もひね、あんなに怪しまなくともいいと思つんだよね…………」

ホリーはマッチと乾ききった木の枝で相當に冷え込む砂漠の夜のために焚き火を起こしながらそう呟いた

ここは先ほどの場所から十数キロ先にあるオアシス

あの不必要に重そうな棺桶を背負いながら暑さと重さに死にかけつつも地図に書いてあるオアシスを目指して歩き続け、なんとかかんとか辺り着いたのであった

「アルビノだからこそ…………あつちでもこいつでも…………」

と、自分の特徴的な白い肌と赤い眼を嘆くホリー

彼女の一族は遺伝子の突然変異によりアルビノとして生まれてくる

色素が少ないため、色が白く、血管が透けて目が赤く見える

彼女のいた世界にはある力の發揮により目を赤く染める者達がいるが、それとは違うただの体质だ

色素が少なすぎるため、太陽光に極端に弱い彼女の一族は好きなお面やマスクで顔を隠し太陽光を遮る為黒いロングコートを着用し、主に夜に行動している

しかし、ホリーは地平線に隠れそうな夕日に眩しそうにしながらもマスクで顔を隠すこともしない

## テガート・テガート2（前書き）

最初は書き方わからなくて変な所から区切りましたが今回からばつ  
ちりです。……たぶん

## テザート・テザート2

手をかざしわざかに躊躇しきりにするだけのホリーはむしろ消え行く  
太陽を惜しんでいるかのようであった

そして日の光が完全に途絶えてしまつと同時にホリーはなぜか目の  
前にある水筒を軽く手探るようにした後、水で焚き火を消した

そしてまた一つ大きな溜め息をつき座っていた毛布の上に「コロロン」と  
横になり、近くの掛け布団をガバッと被り

「おやすみなさい」

と、眩き眼を開じる

そして時間的にはかなり早めに横になったホリーが長い間眠れず、  
しかしそうやく寝息を立て始めた時に

ホリーの背負つていて、今はホリーの横に置いてある棺桶が「ゴトゴ  
ト」と中から音を立て始めた

それはまるで夜の到来を告げる音のようでもあった

眠りの底につくホリーを照らし出すような眩しいが決して不快では  
日の光と、微かに、しかし確かに香つてくるパンを焼く匂いにホリ  
ーは目を覚ます

決して寝起きの良くないホリーは頭を優しく包むように支えてくれる羊毛入りであろう枕に一度顔を埋め、ボーッとした後、足をばたばたさせながら、んーっ…………と伸びをした

そしてそのばたばたが突然ピタリと止まり数秒

がばりと体を起こし叫ぶ

『الْمَكَارِ』

慌てながら周りを見渡すホリーの目に入ってきたのはこのあたりの砂漠の中にある街特有の乾かしたレンガ作りで作られた壁

その壁と床に敷かれたきめの細かい生地でどこか幻想的で美しい模様が描かれた絨毯を見てホリーはここは砂漠を抜けた辺りの町かな……とあたりをつける

そしてホリーがとりあえずベットから降りようとしたとき

ドタタタと元氣すぎる足音と共にドカーンと豪快に扉が開けられる  
そして開け放たれた扉から顔を出した髪は短く浅黒い肌の快活そう  
な少年が開口一番

その言葉にホリーは全てを察し

「書き置きかなんかを残しておいてくださいっていつもいつも言つてゐるのになあ……ホントにあの人は……」

一人つぶやきながら異様な存在感でベット脇に佇む棺桶を睨む  
そしてえ？え？と、戸惑う少年の方に再び顔を上げた時にはどこか  
諦めたような笑顔を浮かべていた

「私の名前はホリー。職業は捕縛者<sup>キャッチャ</sup>。クラスはレギュラーだよ。年  
は秘密で、好きな食べ物はラザニア。それでね？教えてほしいの。  
ここはどうで、あなたは誰？」

ホリーのまくし立てるような自己紹介と、昨日泊めた旅人の変身つ  
ぶりに少年は少しのまれて立ち尽くしてしまつ

そして少年がなんとかフリーーズ状態から解け

「……に、兄ちゃんは実は姉ちゃんだったのか？」

と、微妙過ぎる勘違いにホリーが一から説明し直すのはそつ遠くな  
い未来だった

## デザート・デザート3

テーブルの上には少々朝には重いかもしぬないがそれでも十分に食欲をそそる刺激的な香りを放つスペイスがふんだんに効いた鶏肉の料理と、反してほかの料理を引き立てるようなあつさりとしたスープが並んでいた

真ん中には先ほど焼いていたのであるこのあたりでよく見かける白い薄めのパン

そしてそのテーブルを囲むのは五人

ホリーと棺桶を泊めたその一家

帰るべき場所がある者たちにとつて旅人の話というのは三度の飯よりも彼らの興味を引くのである

この一家に関してもそれは変わらないのだろう。ホリー以外の4人は冷めかけている自分の料理を忘れてしまったかのようにホリーの話に聞き入っていた

「それではあの棺桶の中で今まであなたは寝てたんですか？」

と、訪ねたのは一家の家長で先ほどの子供の父親。実は子供より彼が一番食いついていたりもする

「はい、あの棺桶の内側に魔法陣が書いてあって外からの衝撃とか諸々は無効化されるのです」

「魔法陣、と?……ではあなたはウイック家の一員で?」

「いえ、私ではなく古い友達が」

へー、ほー、と食卓を囲む面々が感嘆の声が漏れた

世界に僅かしかいない魔法使い

単純な力や権力、そして物理的、科学的な力一切全てを無視して生きる彼等は『フォース・アウター』力の外側とも呼ばれる

ただ、あらゆる国家からの干渉を受け付けない彼等全てが、唯一作る群と見なされる『魔の理』魔の理』

魔法使いは魔法使い同士の繋がりはとても強いが以外にはとても排他的、というのが通説になつており

実際彼等と知り合い、友人となるには大変な労力を要する

ただ、何よりも仲間を大事にする彼等はウィックカのメンバーの仲間という全くの第三者さえもかけがえのない仲間と見なし助力を惜しまない

ウィックカの後ろ盾があるということ

それは捕縛者等純然な実力主義社会である程度の目安になるクラス制度よりもはるかにステータスになる

ただ、それはあくまで彼等を常日頃から雇つたりしてゐる人達にとっての話

大半の人はおそらくどこかの国家規模の行事にたまーに出てくるような魔法使いと友達というだけで驚きなのだそしてこのご一家はは正にその典型なのか、一定以上の地位の者しか魔法使い達とは会うこともできないため、本来あり得ないはずのクラスがレギュラーで魔法使いと友人というところには全くつっこまず、彼らの興味のベクトルはホリーの友人だという魔法使いに向けられていた

ホリーはそんな彼等の

「ねえねえ、魔法使いつてどんな人達なの？」（b y少年）とか  
「ウイック力には凄い美人がいっぱいだつて聞いたけど本当かい？ぜ  
ひとも？」しょ…………。あ、うそ、うそだつて！－愛してるのは

お前だけさ－－」（b y少年の父親。睨んでたのは母親）

「でも、魔法使いには良い男も多いって聞いたことがあるわ。……本  
当なの？一人紹介してくれない？」（b y母親。田那さんに聞こえ  
ないくらいの小さな声だった）

そんな質問に苦笑しながら、じついう時は多少演技がかつた方がウ  
ケが良いと知っているホリーは彼女持ち前のサービス精神を發揮し、  
一家の質問がある時はオーバーに、またある時は声を潜めて答えた

そして、とりあえず一段落ついた頃  
食後に出されたお茶に口をつけながら、ホリーは気にしていたがな  
んとなく聞けなかつた事を訪ねてみる

「あの、一つ聞いてもいいでしょーか？」

「なにか？」

にこやかな笑顔で問い合わせられ、なんとなく言いづらくなつたホリー  
はうつむき加減の上目使いで言いづらそうに言葉を発した

「あ、あの…………私のこと、怖くないんですか？」

その問いに一家は揃つてきょとんとする

「怖いとは？」

そして聞き返してきたのは田那さん

「……えつと、髪とか。目とか」

「…………あ、あの～……。質問の意味がよくわからないのです  
が？」

その言葉にホリーは意外そうな表情を見せる

彼女はこの世界に来てかなり長い。例えばこの世界最大の国家であるサンレイル王国の首都のような様々な人々な人種が集まるためそれほどでもないが基本的にこの地方のような田舎に来るとホリーのような特殊な外見を持つ者は忌避されることが多い  
なのでこの一家のように全く自分を恐れず、どころかなにが怖いか  
わからないというケースはなかなか珍しい物だった

だが、不意に奥さんが考え込むようにした後  
なのでこの一家のように全く自分を恐れず、どころかなにが怖いか  
わからないというケースはなかなか珍しい物だった

「あー……、でも確かにでも少し近づきにくいかも……」

との言葉に、一家一同にうけいりをみて

「確かに」……「やはり

「うん……」と同意する。そして今まで一言も喋っていない少年の妹らしき少女まで

「…………怖い」

と、いつ

あまりの態度の変化にホリーは少し戸惑つも

「…………やつぱり、ですか?」

と、慣れ故のどこか寂しそうな苦笑

その苦笑に少年がまるで何かを壊した事を告白するかのように口づつ

「うん。姉ちゃんの格好。ちょっと怖いかも…………」

「ヤーだよね。こんな銀の髪悪魔みたいだよね。お前には血の池が  
お似合いだ。地獄へ帰れってかんじだ……。か、格好?」「

聞き返すホリーに

「その黒い外套とお面はちょっと…………」

「不気味、だよね…………」

「お面が笑ってるのがまたいい…………」

「そ、そりですか…………」

ホリーにとってはまさかの問題点に少しばかりカルチャーショックを  
受けたホリーはしかし嬉しそうでもあった

「あ、セツコえば」

突然思い出したように田那さんが声を上げた

「あなたには自己紹介がまだでしたね。私はローワン・アルバート。そつちが妻のシガニー。息子のクライブと娘のレネです。この度はご利用頂き私が家族を代表してお礼を申し上げます」

最後の「ご利用」という言葉にホリーは違和感を覚え

「「ご利用って何ですか？」

「あれ？ クドラーク様からお聞きになつておりませんか？ 私達宿屋を経営しております、といつても宿泊施設みたいなものではなくてですね。ただ部屋をお貸しするような物なんですがれど。昔訪れた異国の旅人が言うには彼等の国のミンシユクという施設に近いそうで。私達もミンシユクを名乗つております」

「そ、そりなんですか。我全然聞いてなくて……」

「それでは一週間程お泊まりになるといふのも？」

「全然……」

ため息をつきながら、相変わらずの相方の勝手振りにがっくつしだが

……まあいいか。ここに泊めてもらえるんなら

と前向きに座る」としたホリーは笑うと

「ホリー・ヴァランスです。一週間ようじくです」

と、ペコリとお辞儀する

その後食卓を包んだ空気は先ほどより暖かい物だつた

## デザート・デザート4

組立式の屋根の軒下に広げられた露天の若い店主さんは突然やつて来た風変りな女性に見ほれていた

その女性は白とピンクのTシャツで、黒いコートの袖の部分を前で結び腰で巻くようにして、なぜか頭にはお面を斜めにかけていただが、彼が目を奪われたのはその変わった格好ではなくそのサラサラとなびきつつ輝きを放つ長い銀の髪と少し垂れ気味の鮮やかな赤さを湛えた目

そして彼が売っている商品を入れた氷系統の魔法陣によりクーラーボックスタの役割を果たす箱の中をまさぐる手は病的なまでに、しかし透き通るように白く美しい肌が目にまぶしい

そしてその女性は彼の日光より熱い視線には気付かず、ん……と悩むと、遠くの地方から仕入れてきた甘い果実で作られたジュースを2本手に取つた

そこで、彼は気付く

……連れが、いるのか

ある種運命的なものさえ感じていた彼はいきなり壁にぶち当たるものの

「いらっしゃですか？」

との声（想像通りの可愛らしい声だった）に彼のとつておきの笑顔で微笑みながら

「あなた……旅人さんですね？では、同じ旅人のよしみ、という事で一本で140ルドで結構です」

と、返す。実は140ルドは一本の値段で、大赤字だがそんな事はこの出会いに比べたら些細な物だ

女性はこの値段に少し驚いた顔だったが、すぐに世の男という男を落としてしまうような笑顔でありがとう、と言いながら140ルドを財布から取り出し手渡した

その笑顔に手応えを感じた商人は内心ガツツポーズ  
これできつとこの女性は少しだけでも自分の事を印象づけたに違いないと確信して

旅先での出会いは、普段は孤独なだけあってよく覚えているものだから

そして男の性として代金を受け取るときに少し手に触れるのも忘れない

そして女性はもう一度お礼を言つと、振り返り小走りに駆けていく

彼女の視線が商人から外れた瞬間、彼の視線が鷹のような鋭いモノに変わった

彼の人生最高のターゲット。そしてその最大の障害になるやもしれない彼女の『ツレ』を見極めるべく  
手に取つたジユースは2本。つまりメンバーは彼女と謎のもう一人だろう

若い彼女が友人や親らしき人物と旅をしているなら搦め手から行く

べきだし

恋人の様だつたら奪い取るための作戦を考えなければならない

彼女は小走りに走つていった先、建物の影で立つていた人の前で止まる

「はい、これあげる」

優しげな笑顔で飲み物を差し出した相手は

背の低めな彼女よりだいぶ小さい男……の子

「え？ ほんとか！？ ありがとうーー！」

……ん？ 子供？ え？ 子供？

……あーあーあーあー。 子供ね？ 子供……

「つて子連れかよ！……！」

そんな彼の悲痛な叫びは彼女へは届かず、周りの人間に変な目で見られてしまつた彼の店は、その日は閑古鳥が鳴いていた

一週間という長めの滞在なので町案内を提案されたホリーは案内役を任されたクライヴと共に町中を歩いていた  
クライヴの子供らしい感性で語られる町案内にホリーは笑いつつ町を見て歩く

先ほど買つてきた飲み物は軽いお礼も兼ねており、予想以上の反応を返してくれたクライヴの笑顔は人をひきつける魅力に溢れた物だつた

そして、そんな折に見つけた一軒の建物にホリーの視線は注がれる

「うわっ、なんかアヤシイお店発見」

そこはこの辺りの家屋に使われる白い粘土を塗り固めて作られた街並みの路地の先にある、くすんだ壁やら窓枠にはめられた暗めの色のガラスやら全体的にあやしげーな建物

ドアの上にはかすれた文字で何かかかれておりなんとなく看板らしきものの位置からここが商店なのだろうなといつことが見て取れた

「ああ、そこへそこは雑貨屋……らしいよ」

「ううしー？」

町案内担当のどこか不明瞭な答えにホリーは首を傾げながら聞き返す

「うん、入ったこと無いけどーちゃんが言つてた」

「そつか。入ったことないんだ」

少年のなれた案内振りから何回か町案内は経験があるようだつたがさすがに全部の店を知つてるわけないかとホリーは納得した所に

「うん。ていうか子供は入るなつていわれてるんだけどね。なんか十八歳になつたら良いんだつてさ。むしろ18以上の男なら入るべ

きだーーとか

「…………」

親父さんーーとホリーは反射的に口を塞がなったツッ 「!!」を懸命に  
を抑えつつ、立ち入り禁止でふとまだ言つてないことを思つ出し、  
少しまじめな顔でクライヴに向かつた

「あのね? クライヴ君」

少しまじめ顔のホリーに対してクライヴは快活そうな笑顔のまま返  
事をした

「なんだ? ねーちゃん」

「夜、月がてっぺんに来てから沈むまでは私の部屋に来ちゃダメだ  
からね?」

その忠告にクライヴはきょとんとする

昔から宿屋としての心得を叩き込まれてきたクライヴはたとえどん  
なに仲良くなろうと夜に無意味に訪れるなんて事はプライベートな  
時間の邪魔という事で有り得ないことだつたし、訪れたとしても何  
か頼まれるなり、ちゃんと招かれた上で、だ

今までのお客だつてそんな事は当たり前で、今みたいに改めて言わ  
れることなどまずない

なのにホリーは釘を刺すよつこ「部屋に来るな」といつ。しかも月  
がてっぺんに来てからは来るな、という時間限定だ

クライヴは少年ゆえの好奇心をくすぐられ

「なんで？」

と、訪ねるが返つてくるのは

「え？……あー、うん。危ないからかなー？……こんな意味で」

ともなんとも的を得ない言葉ばかり

そこでクライヴは思い当たる。彼がにーちゃんと呼んでいたホリーとは対をなすような金髪の青年絡みなのではないかと

今朝ローワンがホリーにクドラーク様の朝食は？と、聞いたら用意しないでいいとの事だつた。それどころか三食用意しなくていいと言う。シガニーが心配そうに昨日出した食事が口に合わなかつたのかと心配していたがそれでもないらしい。ただ単純に必要ないといつことだつた。

ウイックの中には修練のすえ食事の必要のなくなつた人間もいると  
いうが、そういう人物は大抵人格的に破綻しているという  
なのでよる部屋に危ないから来るなど言つならまず考えられるのは  
クドラークが危険ということになるのだが

クライヴが少しだけだが話した限りでは言葉の端々から気高さと傲慢さが感じ取れたものの、なんとなくだが親しみやすさも感じた

なので少し疑問に思いつつクライヴはホリーに質問を重ねる

「あのクドクをひいてにーちゃんが危なーつーとか?」

「ふー。やつなんだけどやつは「じやないんだけどやつなんだよねえ……。半分はクドさんのが悪いんだけど半分はラクさんのが悪いってゆうか……」

「意味わかんねえぞねーちゃん……」

「じとんはつきりせず果てはなにを言いたいのかさっぱりわからないホリーの言葉にクライヴは首をかしげる

クライヴの納得してていないう様子を見てホリーは困った顔をしたものの、すぐさま開き直ったようにパンと一度手をたたいた後

「今のはもう終わりね? とつあえず私の部屋に来ちゃうのはダメなのだよ。」

とクライヴの頭をなでながら笑うと先に歩いて行く

父の「おこの境ではそれ以上過ぎしなが」た

ただクライヴは生殺しにされたような気分になつていったが

結果からいえばホリーは完璧にミスを犯していた

深夜に来て欲しくないならクライヴにあえて言うべきでは無かつたし、クライヴの質問にはあいまいではなく嘘であればつきり答えるべきだった

まさに藪をつつくような真似をしたのは話術はともかくとした今ま  
で仲間以外に避けられ過ぎにしてきた所からくる、ホリーの「ミコニ  
ケーション経験の少なさと、『クドラク』という存在の異常さ。こ  
の二つが大きい

結果。三日後、クライヴ少年は思い知ることになる。大人過ぎる女の怖さというものを

トマート・トマート（繪書モ）

まともりが無い文章だなあ……

## テザート・テザート5

天には魔性が宿るといわれる三日月が昇る砂漠の夜  
わずかな音がどこまでも響いていきそつにも感じる砂の景観はしかし、どこまでも静かだった

こんな夜に活動するのは人目を忍ぶ逢い引きか盗賊か

そして砂漠の外れのある町の宿屋でまたに盗賊よろしくドアの前で息を潜める少年が一人

「…………ふふふ。三日大丈夫だったからって鍵を閉めないとは……  
甘い。甘いぞねーちゃん」

それはまさしく三日前ホリーに部屋に来るなといわれ、なんとなく気になつた理由は散々じらされた上に聞きたい事をうやむやにされなんとなく気になる。から、ずえ～つたاي暴いてやる！！にモチベーションを上げてしまつていたクライヴ少年だった

そしてクライヴは田的のためにには少年らしからぬ冷静さを發揮出来る11歳だったのである

彼は田的の為に勇み足を踏んでしまうことを何よりおそれた

忍び込もうといつ部屋の相手は賞金首の人間や魔物を捕らえるため獲物の限られた情報を元に、最も効率よくとらえるため、弱点や習慣等を下調べし、実践では田標の捕捉等ありとあらゆる意味で捕獲を司る捕縛者。まさしくプロである

クラスがレギュラーといつ事はそこそこ腕も認められ始めてきたと

いう事

警戒されている中、忍び込もうなどといつのはまさしく愚の骨頂だ  
るつ

なのでクライヴは待つた。ひたすらに。いつか来るだらうチャンスを  
クドラークは深夜に必ずどこか出かけるため、問題となるのはホリー  
だけ

クライヴは今までの客の経験から、そういう仕事を生業にして生きる者達が旅をするという事は、獲物を追っている時と知っていた海路が発達しているこの「」時世にわざわざ大陸一の砂漠越えなどしたのだから相当な大物なのだろう

敵が強大で、しかし長期戦ならば宿は心置きなく休める場所に作るべきであり、同時に心置きなく休むべきである  
心身を休ませなくして勝ちなどあり得ない  
特に精神力が物を言う魔法を使った戦いでは

しかし結果そこに隙は生まれるはず

そしてそれはクライヴ少年にとって大チャンス

現にホリーはこの3日、朝早くから夜遅くまで情報集めかはたまたもつ捕獲に入っているのかどこかに出かけていた

そして例外なく帰つてくるときは例外なく見るからに分かるくらいにへとへとであつた為、チャンスはありそうだとクライヴが見込みは正しく

ホリーが泊まり始めて一週間近くなつた今日  
クライヴ少年にとって待ちに待つ最大のチャンスが訪れていた

「おじやましまーす……」

声を潜め音を出さずには配を泄しつつしかし挨拶は忘れずに部屋に侵入するクライヴ少年

ベッドのサイドテーブルに置かれたランプは消えていた  
しかし今日は満月のため窓から差し込む静かな月明かりで中はよく見える

いつもの見慣れた部屋だが机の上には見たことの無い本が積み重なつており、クローゼットにはホリーの物と思われるTシャツやキャミソール、そして砂漠越えや陽の強い日に使う羽織りと、クドラクの着ていた襟のたつたYシャツ、襟のたつたポロシャツ、襟のたつたマント……

「……どんだけ襟立てたいんだろ」

……が並び、そしてなによりベッドの横には相変わらず鉄製の棺桶が立てかけられていた

確かに一般の客と見ればおかしな部屋だが、普通の客じやないのはクドラクの最初の一言でわかる

深夜いきなりやつて來たと思こいや、ドアをどんどんノックし、一家を叩き起こしたことを悪びれもせざいきなり札束を放つてよこし

「なにも言わずに私を泊めや」

と、くれば普通の宿泊客とは間違つても言えないはずだ

その上でのホリーの口止めがあつたものだから果たしてどんなお宝財宝魑魅魍魎があるのかと思つていたが

「……なんもないなあ」

クライヴ少年の想像していたよつた怪しげーな一品は見当たらぬ大事な物は身近に置くものかな、と全力で足音を忍ばせベットの近くまで行つてみたがベットではすうすうとホリーが眠るだけだった

「……なんだよ、もう。忍び込み損じやん」

まだまだピュアボーライなクライヴ君は、ホリーの寝顔にグラッともぐることもなく

これ以上長居はまずいと撤退すべく細心の注意を払いつづアヘと踵を返し

だから、さよならを教えて

「ん……？誰か歌つてる…………？」

今まで聞いた事のない響きの唄を聞く  
聞き続ければ心から凍えそうな声に

「テラス…………？」

少年の足は自分の意志とは別の力で引きずられているよつて外を眺

められるトライスに向かう

テラスに出て、不思議と先程より怪しさを増した満月との時期特有の夜の肌寒さがクライヴを迎えた瞬間に

「こつしゃあい。この姿では始めまして。かしらあ？」

「ひつ…………！」

今さっきまで確かに誰も居なかつた背後から首に両腕を回され耳元で囁くようにあの眼と声がかけられる

「ずっとねえ？あなたとはお話したかったんだけどお…………。ホリーがダメって言つからあ…………。我慢してたのよ…………？」

首に回された腕の人とは思えない冷たさ、耳を撫でる声の響きにクライヴは声が喉の奥で詰まり腰は抜けそうになるが、なによりクライヴの身動きを封じていたのは声の一文字一文字が耳の奥をなでる度に突き抜けるように走る、今まで味わったことのないえもいわれぬ快感

「自分から会いに来てくれるなんて嬉しいわ…………。妹さんもどつても可愛いくらいし…………。新鮮で柔らかそうだとつても美味しいぞう……。食べちやいたいくらい…………。食べちやおうかしひ…………」

クライヴ少年には食べちゃおうの意味がわからない  
ただ、なんとなく別に食べられても良いかな…………とこつ思いがボーッとして頭の中、ぐるぐると翻ひ廻る

「一口ぐらご、ここわよねえ…………？ちよつと人間止めちやうかもしないけどお…………」

言葉が終わるか終わらないかの辺りで小さこいつの尖ったようなものが首筋にあてがわれる

「大人しいわねえ……。怖いのかしらあ……？大丈夫よお、おねえさんに任せれば天国に逝っちゃうくらい気持ちよくしてあげるからあ……」

『尖つたもの』の先が皮膚と合わさつた時にクライヴ少年の全身には今まで耳から脳を揺さぶつたようなじわりじわりとしたものとは違い体中を強くしびれさせる電撃が走る

ただし、それまるで快感と充足感と幸福感、いつまでも身を任せたくなるような安心感。それぞれ何乗にもなつたような物で作られた

稻妻  
その稻妻はクライヴ少年の思考を完全に遮る

……止めちゃう？人間？人間をやめる？人間……って……あれ？  
……いつか、なんでも

「いただきま  
」

「　何やつてんですかあ！－！」

「きやん！－！」

クライヴに手を回し、二本の牙で首筋を甘噛みしていた金髪の女性に、ホリーは机にあつた厚い辞書を鉄槌の如く振り下ろした

「いたつ！！」

刺さった。グサッと、グサリと

「あつ」

「あつ」

「あ、え？あー？」

「えつ、あつ、えええええ……？」

「わ、私のせいじゃないわあ……ホリーが後ろからあつ……あ、  
とっても美味しい……」

「あ、とっても美味しい……じやないですよ……止血……止血……  
！」

「ああつ。そうねえ……あつ、ダメえ……。最近女の子ばっか  
りで男の子の血なんて久しぶりだつたからあ……」

「もの欲しそうにしてないで手を動かせ淫乱吸血鬼……」

そんな感じで夜は更けていく

先程までの静けさはどこへやら。騒がしくなった宿の周り  
ホリーの部屋を監視するよつて覗くいつもの影が溶けるよつて、  
消えた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5253f/>

---

World Decoder

2010年10月12日01時22分発行